

地域交流を行うボランティア組織における、継続するチームに関する質的比較分析

経営学研究科 経営学専攻
修士課程
マーケティングコース
高嶋 大介

要旨

コミュニティ内の合意形成において、テンニエス(1957)は、ゲマインシャフトという従来からある、自治会、町内会に代表される地域に暮らす人が中心となる「地縁型コミュニティ」と、ゲゼルシャフトという地縁にしばられず関心のあるテーマごとに集まり「テーマ型コミュニティ」の2つあるとしている。「地縁型コミュニティ」に比べ、興味関心でつながることから「テーマ型コミュニティ」は形成されやすいが、崩壊もしやすいことが予想される。

コミュニティの運営ではメンバーのモチベーションが重要となり、それを導くための要素が必要となることが明らかである(松村・畦地 2001)。コミュニティは有志にて運営される傾向が高い。伊藤(2011)によると、有志活動に対するモチベーションが利己的、利他的、あるいは明確に線引きできないものの三種類に分けられるとされている。

本研究では、『有志によって構成されるテーマ型コミュニティが、ティール組織のように機能しているのか、あるいはトップダウンによる組織運営が有効なのか?どのようなマネジメントが目標達成に向けた要因になっているのか』について、「テーマ型コミュニティ」である、100人カイギを対象として明らかにする。

100人カイギとは「5人のゲスト呼ぶイベントを20回行い、ゲストが100名になったら解散するのがルール」と、終わりのあるコミュニティ活動として、全国79地域・テーマ(2022年11月1日時点)で開催されている。

5回以上実施している62地域の運営メンバー460名対象としてアンケートを実施する。アンケートに先立ち3名に半構造インタビューを行い、「リーダーがいること」「意思決定はリーダーがいるものの、必ずしもリーダーが行っていない」「目的の共有」「声のかけやすさ」の要因を関係することを確認した。アンケートに42名の有効回答を得た。「テーマ型コミュニティ」のサンプルデータが少ないことから、fsQCA(ファジイ集合を用いた質的比較分析)の手法を用い分析を行い、3つの組み合わせを発見した。

分析結果より、良いチームを生み出す必要条件として、「リーダーの存在」が必要であるということ分かった。「目指す姿の共有」「声のかけやすさ」はすべての組み合わせではないが、2つ以上の組み合わせで中心条件としていることから、重要な要因と言える。

それぞれの組み合わせを読み解くと、性別によって参加動機が「利己的」か「利他的」が異なる。今回のデータでは、良いチームを生み出すには、男性リーダーが利他的な理由で参加すること、女性リーダーおよびメンバーが利己的な理由で参加することが望ましい、ということになる。メンバーに関しては、良いチームを生み出す条件の組み合わせにおいて、参加動機は常に利己的であるという結果が得られた。利他的であることはむしろリーダーとなりやすく、結果としてメンバーとしての参加者は利己的であるという結果を得られたのだと推測する。「目指す姿の共有」がなされている組織は、組合せ1・2の固有被覆度が0.17および0.1と双方において高水準である。目指す姿の共有がされていない組織は固有被覆度が0.03ということから、目指す姿の共有されることが重要だと言える。「声のかけやすさ」は、組合せ2・3で中心条件となっているが固有被覆度が0.10および0.03と開きがある。また、声のかけやすさは女性においてより重要だが、男性においては影響がないことが分かった。

本研究の課題は、参加しやすいものの脆いという特徴をもつこの「テーマ型コミュニティ」を持続可能な活動組織に導くために、どのようなリーダーシップが「テーマ型コミュニティ」に必要なかを明らかにすることであった。

データを分析した結果、「リーダーがいること」が必須な要素、「目指す姿の共有」「声のかけやすさ」も持続するチームを運営するうえで重要な要素であることが明らかになったのは本研究の成果であろう。

今後の課題について、本研究における最大の課題は世代間の差について言及していないことである。本研究ではあくまでリーダーと組織の関わり、メンバー構成の観点で分析をしたが、世代間における分析も今後必要となるだろう。